

# もう一つの白鳥の歌

— *The Green Knight* を読む<sup>(1)</sup> —

榎本 真理子

## 1. はじめに

‘The Silver Swan’<sup>(2)</sup>は、*The Green Knight* (以下 GK と略記) の中で、アンダーソン家の長女アレフが妹たちに「歌おう」と提案するギボンズのマドリガルである。GK 中では言及されるだけだが、*The Bell* では歌詞も出てくる (129)。ところで GK は十九世紀小説にも似た豊かさ、そして読者をとらえて放さないストーリー展開の面白さなどから見て、「もう一つの白鳥の歌」と呼ぶにふさわしい作品、*Jackson's Dilemma* と並ぶ、マードックの晩年の傑作ではないかと思われる。

この小説への評価は二手に分かれる。たとえば Elizabeth Dipple はこの小説を、「マードックの作品のうちでも最も人をひきつけて離さないものの一つ」(143) と言ってる。一方で、「トルストイとハーレクイン・ロマンス」をミックスしたようで、「そこにご都合主義の、非現実的なプロットのひねりが加わり、果たしてマードックはこの小説を書いたとき正気だったのだろうか」と疑問に思わざるをえない (Sutherland) という批判すらある。

確かに「トルストイとハーレクイン・ロマンス」というのは言い得て妙だが、筆者としては、ディップルに軍配をあげたいと考える。またディップルは、「マードックの自作を語る言葉は伝染性で、批評家たちは、その用語を使って彼女の小説を論じ続けている」(161) と批判している。平井杏子氏も、そのすぐれた批評書『アイリス・マードック』の中で、マードックの小説を小説として読むことの大切さを強調しているが、筆者も同感である。

GKでマードックは、「トルストイやオースティンのような小説」に限りなく近づいている。その長所は、ストーリー展開の面白さ、複数の主要人物がきちんと書き分けられ、それぞれ独立した存在感をもっていること、シンボルやモチーフがストーリーにうまくとけこんでいること、などである。

*Sir Gawain and the Green Knight* (以下「サー・ガウェイン」と略記)<sup>3)</sup>の中のグリーン・ナイトは、ガウェインに生と死について考えさせる役を担っている。GKでも中心的なエピソードは、ルーカスに殺され、のちに甦るピーターの復讐劇である。またGKでは、グリーン・ナイトに当たるルーカスのみならず、他の人物たちも生と死について思いを巡らすのである。以下、本稿ではGKの魅力をさぐっていく。

## 2. GKの世界

### (1) 冒頭

「三人の少女がいましたとき。そして井戸の底に住んでいました」という書き出しでこの小説は始まる。ルイズと散歩をしながらジョーンは、子供たちについて、「魔法をといてくれる人が必要ね。どこかよそから来た人が」(1)とコメントする。又二人はルーカスの噂話をする。無名の語り手は、「もと bad girlのジョーンと、もと good girlのルイズ」と、登場した二人についてすぐさま説明を加えている。さらに「時は十月、場所はケンジントン・ガーデン」などと、伝統的な小説の普通の読者が知りたがるであろうような情報を、すぐに与えている。現代の様々な小説の中には、登場人物について詳しく語らず、謎に包まれたままにしておき、その人物について知りたい、という読者の好奇心をあおる類いのものもある。また主人公がどのような人物かはおろか、窓の外の天気すら分からないメタフィクション<sup>4)</sup>もある。しかし先に引用した冒頭部分から、GKの世界が、それらの現代小説からは遠いものであることが明らかである。それでいてGKは、決してただナイーヴな、十九世紀小説そのものの世界というわけでもない。ちょうどアンドリュー・ワイエスの絵のように、それはきわめて写実的でありながら、どこかありのままの現実から、もっと厳密に言えばいわゆるリアリズム的表現からははずれている。ま

たこの冒頭の部分は、読者にこの小説全体を、お伽話的な読み方と、現実的な読み方と、二つの方法で読むよういざなっている。

ベラミはアンダーソン家のことを「許しと調和の場」であり、「完璧すぎるために、崩壊しようとしている」(46) かのようだ、と言う。またモイは「私たちどうしてこのままではいけないのかしら」と言い、アレフは「そんなこと不可能だからよ」(17) と答える。

## (2) ピーターとルーカス

ルーカスはずっと弟クレメントを憎んでいた。そしてあるとき彼を殺そうとする。ところが邪魔が入り、かっとしたルーカスは代わりにその男を殺してしまう。表向きは、散歩中に暴漢に襲われ、財布を奪われそうになり、正当防衛で男を殺したことになる。ルーカスは一躍「市民の英雄」ともてはやされ、マスコミを避けて、姿をくらます。

第二章の冒頭、ペンギン版だと80頁で突然作家が介入して、実際のところ何が起こったのかを説明する。ただし、あくまでも「クレメントの目から見て」ということになっている。

*It is necessary at this point to recount what actually occurred, as opposed to what was generally supposed to have occurred, on that terrible evening when Lucas killed a man. The story, so frequently run through, enacted, polished, probed and interrogated in Clement's mind, ran as follows....*

*Perhaps it is better first to explain, the relationship which existed between the brothers (emphasis added).* (80)

作家の介入の例をもう一つ御紹介しよう。クレメントが、行方不明になったエイナックスを探しに行き、あわやというところで見つかりそうになりつつすれ違ってしまう場面である。ここでは作家とおぼしき無名の語り手が、“If at that moment Clement had caught sight of the dog and had managed to capture him, the fates of a number of people in this story would have been entirely different....” (185) と、最初の例よりもっと明確に、コメントを加えている。これら、作家の介入については後程また触れることとする。

ルーカスは数カ月後に戻って来る。それを聞いてクレメントが会いに行くと、緑の傘を持った男がやって来る。それは生き返ったピーター・ミア<sup>⑤</sup>であった。人のために死んで、後に甦った彼は、グリーン・ナイトと共にキリストのイメージも合わせ持っている。ピーターはjusticeを、殺人現場の再現を求めた。クレメントとベラミがそれに立ち会う。暗い現場で、ベラミが「光あれ」と祈っていると、本当に光が近づいてくる。光はマードックでは真実の認識にかかわる大切な役を持っている。彼らの上に何か光るものが落ちて来て、ピーターは気を失うが、その結果、忘れていた大切なことを思い出す(281-282)。それがmercyであり、Godであった。この場面はベラミの視点から語られているが、かんじんのところでベラミは一種のトランス状態となっている。従って正確なところ何が起こったのかは不明のままである。

この後ピーターは、「ひとつお願いしたいことがある」とルーカスに手紙をよこし、彼の家を訪れる。そしていつも持ち歩いている緑色の傘の中から長いナイフを取り出し、ルーカスの脇腹にかすり傷をつける。このくだりも、「サー・ガウエイン」によく似ている。このシーンはクレメントの目から語られるが、クレメントは肝心なところで気を失い、またしても実際何が起こったのかは不明のままである。

これはディップルの言葉を借りれば「ただ一つの正しい解釈」を拒否し、その単一の読みに安住しようとする読者の期待を裏切り、「現実の決定不可能性、現実の絶対的解釈の不可能性」を読者につきつけることによって、改めて現実の捕らえがたさを身をもって体験させる手段である(144)。このことはまたマードックの宗教的探求とも関連している。つまり小説についても、宗教的探求においても、「一つの決定的意味を見いだすことは出来ないと、読者に悟らせるという点で、文学は有効な手段たりうる」のであり、マードックはそれを実践しているとディップルは言うのである(144-145)。

ピーターが望んでいたもうひとつは、「家族を持つ」こと、つまりアンダーソン家とその周りの人々に受け入れられることであった。ピーターは最初は人々にうさん臭く思われ、うまく行かない。しかし行方不明になったエイナックスを見つけて連れて行って以来、彼はすっかりアンダーソン家の人々に

信頼されるようになり、周りの人々にも受け入れられるようになっていく。皆はピーターに惹かれ、彼を特別な人、聖人のような人とまで思うようになる。

ピーターの家でディナーパーティーが開かれていると、ドクタ・フォンセットと名乗る人物が現れる。ピーターは蘇生したあと躁鬱病で入院していたのに、逃げ出したと彼は言う。人々は驚くが、ピーター自身は、疲れたので病院に戻りたいと言う。またピーターは精神分析医だと自称していたが、それは嘘で、裕福な食肉業者だということも判明する。こうして人々の混乱のうちに、ピーターは舞台を去る。そしてしばらくの後、「ピーターが病院で死んだ」という知らせがルイズのもとに届く。

ピーターと緑の騎士との共通点は、いくつも見られる。例えばピーターの背がとても高いことが何度か強調されているが、これもそのひとつである。並外れた背の高さは、彼の持つ力を視覚的に表現している。また緑の騎士は Green Man の伝統（アンダーソン）にも根差している。ピーターが「動物を思い出させる」という再三の指摘は、グリーンマンに由来する。グリーンマンは、キリスト教に対しては異教、人間に対しては自然であり動物である。グリーンマンはまた、復讐を求める暗い情念、そして情欲をも意味する。母なる大地との結び付きも強い。グリーンマンとは、ごく大ざっぱに言えば、文明化社会に生きる人間である、主体としての「私」が自己として認識する以外のすべてのものの表象と言えるであろう。それはまた豊かさ、創造性、素朴な喜び、幸せを感じ取れる感受性を人間に取り戻させるものでもある。さらにそれはユングの原型や、ガイア理論とも関係がある。

ルーカスは最後にはクレメントを「許す」気になるが、これにもピーターが貢献している。クレメントの代わりにピーターを殴りつけたことで、ルーカスの憎しみのエネルギーは霧散したのである。

ところで、もう一人の当事者ルーカス・グラフも、非常に mysterious な存在である。未遂に終わった弟殺しは、「子供時代からの嫉妬」のせいであると、一応説明が加えられる。だがルーカスの不思議な魅力がどこから来るのかは、分からないままに終わる。ルーカスの視点から話が語られることがないという事実も、ルーカスのとらえがたさを増し、その存在感を大きくしている。ルー

カスのことは常に間接的にしかわからない。しかも主要人物のほとんどが、しきりにルーカスに会いたがる。本当のグリーン・ナイトは、実はルーカスかもしれないのである。

### (3) 若い世代

次に若者たちのうち、モイについて述べよう。 *The Flight from the Enchanter* ではミッシャ・フォックスが「すべてのものに責任がある」という感覚を抱いていた。GKではモイがそれに似た感覚を抱いている。ミッシャのそれは権力欲に発し、モイの場合は若者の感受性に発するものである。また、彼女のような弱いキャラクターがそういう感覚を抱いているのは、大変説得力がある。彼女は毎日のように、人に踏まれそうなカタツムリや虫を助けているが、もしかしたらこれはすべてむだなことかもしれない、虫たちやモノが本当は自分にどうして欲しいのか、どうやって分かるだろうかと思悩む。

モイはまた、 *The Bell* のドーラを思い出させる。ただしドーラの場合には、マードックが常にその肩越しに見えているような感がある。だがモイの場合には、マードックは上手に姿をくらましている。このこともモイの人物像の現実的な手ごたえに貢献している。二人の姉と違い、出来もよくなければ、美しくもないモイは、常に劣等感と敗北感にさいなまれている。

モイの psychokinesis (この小説の中では telekinesis の語を使っている)、つまり思念でものを動かす力は、思春期から青年前期の若者の持つ、万能感を表しているといっていだらう。彼らは一種のアニミズム的な世界に住んでいる。失恋にショックを受けて、モイは現実の世界に直面せざるをえなくなり、成長を促され、石をまったく動かさなくなる。換言すればこの万能感は、精神的な幼さの印なのである。他の人たちから見ると、モイは常に何を言っているのかもはっきりしない人である。しかしモイは決してただ幼いだけのキャラクターとして描かれているのではない。彼女はこの年の人達だけが持つ、一種マジカルな力、その気になれば、それこそ物を動かすことすらできるかもしれないと思わせるような何かを持っている。マードックは共感と哀れみをこめてモイの内面を美しく描き出している。たとえば次の箇所では、レ

ンブラントの *Polish Rider* に寄せる彼女の思いが詩的な言葉で語られている。

Looking toward the Polish Rider she met his calm tender gentle thoughtful gaze. She thought, what he sees is the face of death. He sees the silence of the valley, its emptiness, its innocence - and beyond it the hideous field of war on which he will die.... He is courage, he is love, he loves what is good, and will die for it.... She thought, he is so beautiful, he has the beauty of goodness. I am a freak, a crippled animal.... I don't yet know what pain is. The world is full of terrible pain. He could see that too. (386)

モイは真正面から死を見つめて生きている。Polish Riderは彼女の分身であり、アニムス像でもあろう。

次にもう一人の若者、ハーヴェイについて述べよう。ハーヴェイは奨学金をもらい、フィレンツェに行って勉強をするはずであった。ところが足を怪我し、それもふいになり、自分の人生は失敗だ、と悲嘆にくれて思い悩む。“Now everything was crippled, everything was twisted, everything was poisoned, like his foot” (256) という具合である。ハーヴェイの足の怪我は、至って現実的・肉体的な怪我であると共に、青年期の苦悩を象徴していると言えよう。彼の怪我がピーターによって癒される、つまり死に、他者に触れることで癒されるのはそのためである。怪我をして様々に思い悩み、また怪我が癒えることによって、ハーヴェイは精神的に大きく成長する。そして「呪い」をとかれ、本格的に恋愛をすることになるのである。

#### (4) “good creatures”

次にベラミ、ルーズ、そして犬のエイナックスについて述べよう。救いを求めるベラミは、あらゆる世俗的な喜びを捨てることにロマンティックな憧れをいだいている。彼は最初ダーミアンを、次にはピーターを精神的な師と仰ぐ。精神的な救いについて、常に他人に頼っている。

これに対し、むしろ平凡な主婦であるルーズこそ、善を体現した人として描かれている。たとえば「ルーズはあらゆることをましにし、敵意をなくさせ、平和をもたらす。その優しさのために、人によってはルーズを退

屈な人と思うかもしれない」(65)と書かれている。

ここでルイズとアレフの関係について一言触れよう。「サー・ガウエイン」には二人の重要な女性、ベルシラックの奥方と、老女モルガン・ル・フェイが登場する。絶世の美女である奥方は、老女の分身と見ることも可能である。つまり二人で一人ということになる。一方GKではルーカス、ピーター、クレメントの三人の男性が、揃ってルイズとアレフの二人に惹かれる。アレゴリカルに読めば、この二人の女性は実は一人である、つまり男性にとっての女性性のシンボルであり、そこに豊饒神的な要素も加わって、世代交替をするという風に読めるのではないだろうか。アレフの内面が描かれず、割合あっさり姿を消すのはそのためではないかと思われる。

ベラミの愛犬エイナックスも、善を体現した存在である。dogのdとgをひっくりかえせばgodになる。ベラミは「犬とは神のイメージそのものだ」と言い、またエイナックスは「何も言わず、善良で、いつもベラミの動きに合わせてくれる。エイナックスは無邪気で、愛情にあふれ、公平だ」と描かれている。アンダーソン家を飛び出し、道がわからなくなったときのエイナックスの気持ちは「自分が誰で、どこで何をしていたかも分からなくなり、何をやる意欲も失せ、時の始まる前の時、ご主人に救い出される前の世界、暗い世界に戻ってしまったようだ」(190)と描かれている。これはちょうど信仰者と神のようにも読める。またこの小説中でベラミはしばしば地獄に行ったときのキリストに思い巡らすのだが、それをも読者に思い出させる。

### 3. リアリズムと象徴の調和、ストレートな作家の主張、そして最後のシーン

象徴がいかにうまくストーリーにとけこんでいるかの例として、最初にクレメントがルーカスに襲われるエピソードを見ていこう。ここでは、真実を照らし出すものである光と、それを隠す闇とが象徴的に使われ、極めて効果的であり、かつ日常的・肉体的感覚の書きこみも、豊かになされている。

...he experienced a calm exaltaion, a marked sense of *presence*, as if for both of them time has slowed down.... Even, as Clement later recalled it,



that supper table, the familiar objects,... enlarged and shining in Clement's slowed vision, seemed to come alive while standing *very still*, as 'witness'... is time like this on *another planet*? (83-84)

クレメントが次第に酔っ払って行く感じ。時がゆっくりになり、モノが生きてきらめいている。テーブルがただっぴろく見える。又、雨が降り出したのにカサをどこかに忘れて来た、また眠れない、と思いつつ眠ってしまうなどが、上述の、現実的ディテールにあたる。

夢の中の家は暗い。その中でルーカスとクレメントが向かい合っている。その暗さは 'so strange' と形容されている。又 goblet や Grail が出て来る。これも「サー・ガウェイン」に関連があるが、紙幅の都合で省略する。

眠りから覚めて公園のようなところについてみると、そこは暗い。ルーカスが武器を振り上げるのが見えるのは、空が大地よりかすかすに明るいからである。しかしクレメントではなく別の男が倒れる。「逃げろ」と言われ、酔ったクレメントは素直に逃げて行く。逃げ帰ったクレメントはフラット中のあかりを全部つけた。そして「ずっと眠れないに違いない」、つまり何が起こったかを凝視しようとしつつ、実際はあかりを消して、シーツをひっかぶって寝てしまうのである。

もう一つ、ルイズがルーカスを捜す場面を見てみよう。ルイズがクレメントをさがして、使われていない小劇場に入っていく。あたりは真っ暗闇だった。そこはバルコニーになっていて、下の方にステージが見え、そのステージ上にクレメントが姿を現す。ルイズは驚いて、一旦は劇場の外に飛び出す。しかしもう一度劇場の中にとって返し、今度は一階席に入っていく。そしてやっとクレメントに会うことができたのである。

劇場の中の暗闇は、現実の暗闇であると共に、ルイズの魂の中をも表している。その真暗闇の中でクレメントをさがす、つまり自分の心の中をのぞき、自分の気持ちを正直に認めることで、やっとルイズは自分にとってクレメントが大切な存在だったことに気づくのである。

次にマードックの主張が割合ストレートに書かれているところを見ていこ

う。まずダーミアンの手紙である。ダーミアンはベラミに「自分が幸せになって、人を幸せにしてください」とか、エックハルトを引いて、「心の中に神を求めよ」と言っている。マードック自身の宗教的遍歴について言えば、キリスト教にあきたらず、さまざまな宗教に関心を持ち、一時は仏教に心を惹かれたと言う。しかしそうするうちに、自分のうちにいかに深くキリスト教が根付いているかに気づいて行った。そして1991年の *Denver Quarterly* ではマードックは“Christian Buddhist”と自称している。また1992年に出た *Metaphysics as a Guide to Morals* の419頁でも、マードックは「私たちは personal god や超自然的な場所などにはではなく、心の中にこそキリストを求めるべきだ」と言っている。これと似た記述は聖書の中にも見られる。たとえばヨハネへの手紙4章12節には「神を見たものは、まだひとりもない。わたしたちが互いに愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛が私たちの上に全うされるのである」とある。またこのあたりについてはティリッヒなどの demythologization (非神話化) が関係がある<sup>(6)</sup> のだが、紙幅の関係で省略する。

ストレートな主張の例のもう一つは、ルーカスの歴史についての講義である。ここでは歴史家や歴史のあるべき姿が述べられているが、歴史を文学、歴史家を小説家と読み替えてみると、ほぼマードックの文学論が語られているに等しい。

この小説の最後のシーンに登場するのは、モイとベラミとエイナックスである。モイはベラミの別荘の近くの海辺を散歩していたとき、沢山の人の頭を目にする。それは silky (アザラシ) だった。モイはアザラシが自分に会いに来たのだと思い、思わず海に飛び込む。しかしかけつてきたベラミに救われる。ベラミが波に飲まれそうになったとき、覆いかぶさる波は「半透明の緑のドーム」と形容されている。今一度緑が、自然の力、死にかかわる風景として現れている。ここでベラミとモイは死と甦りを経験する。何とか浜辺にたどり着いて立ち上がる——その様を後で思い出してみれば resurrection のようだったとベラミは述べている。助かったモイは、ずっと気になっていた、石を戻すべき場所を見つけ、そこに石を戻す。心の中で何かがカチッと音をたてる。これは一種のイニシエーションの完成を意味するものと思われる。ベ

ラミもまた何かが起こったと感じていて、モイの手助けをしてやろうと考え始めている。

そしてこの小説の一番最後には、一月の海で溺れかけてずぶ濡れの二人と一匹が何よりも嬉しいこと——煙突の煙りが見え、家中の暖炉に火がつけられたことが分かった、ということ——が書かれている。つまり十分現実的でささやかな幸せの描写であって、なおかつ象徴的にも読めるディテールで終わっていることになる。

#### 4. 結論

この小説の長所は、最初にも述べたように、ストーリーの面白さ、存在感のある複数のキャラクター、そしてシンボルやモチーフがうまくストーリーにとけこんでいることである。また、19世紀の小説に似ていて、しかも読者が割合すんなり受け止められるようなものとしては、作家の介入、割合ストレートなマードックの自説の主張、キャラクターの外見などを詳細に語ること、またセフトンとハーヴェイのことを臆面もなく「最も美しいカップル」と称するなどがあげられる。これらはself-consciousな小説では、「わざとらしい」として避けられていたことである。しかし実験小説全盛の時代が過ぎ、それらのコンベンションの価値を、マードック自身が見直している。そして我々読者もまたそれらを受け入れられるようになってきているのである。

小説を読むという行為自体が一種の壮大なfictionであり、コンベンションをうけいれることにほかならない。それを受け入れておいて、一方で「作家の介入は小説の本当らしさを損なうからおかしい」というのは著しく一貫性を欠くことではないだろうか。もっとも、我々に作家の介入等を受け入れさせるのは、何よりも、GKが読ませる、読者を楽しませる小説であることによると思われる。

生きること、生きてある、そのこと自体の恵み。そして、それだからこそ感じざるを得ない、生きることの痛み。時が過ぎ去って行くことの痛みとつらさ。

人生の盛りを過ぎた人々の喪失感と過去へのノスタルジー、不安と疎外感

に悩みつつも人生のきらめきに敏感に反応し、傷つくとみすみす知りつつ、希望にとらわれずにはいられない青年期の苦悩、そして地上の汚辱にまみれながら、この世の真実を求め続ける人生の求道者。暖かい家庭、気の合う姉妹たちの心の触れ合いとすれ違い、親しい人達の気のおけない団欒、別れ、喪失、そして海への旅。グリーン・ナイトはグリーンマンでもあり、彼岸の存在、彼方から来る人、彼方の力である。それは自然そのものを形象化したものであり、過ぎ去り行く時のことであり、死でもある。

人々はその彼方からの存在、つまり死、あるいは絶対的他者に触れることによって、豊かさを取り戻し、呪いをとかれ、癒され、あるいはきっかけを与えられ、新たな、より豊かな生へと向かうのである。グリーン・ナイトとはほぼ goodness のことであり、good man のことと言っていいだろう。

しかし「二人の狂った魔術師」のもう一人であるルーカスもまた一種の他者である。このことに気づくとき、私たちはピーター対ルーカス＝他者対自己という単純な対立の構図から解き放たれ、結局のところその絶対的他者はほかならぬ私たち自身のうちにも潜んでいることに気づかざるを得ない。「自分のうちに神を求めよ」というエックハルトのアドヴァイス、そしてキリスト教の、さらには恐らくあらゆる宗教の真髄——ニルヴァーナは、神は、我々の心の中にこそ実現すべきである、ということ——それがこの小説から私たちが受け取れるメッセージの一つである。

このように GK は、読む人を楽しませつつも、人生の大きな真実の一つに私たちの目を開かせている。筆者が GK をマードックの「もう一つの白鳥の歌」と呼ぶゆえんである。

使用 Text : Murdoch, Iris. *The Green Knight*. 1993. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1994. (文中の数字は頁数を表す。)

## 注

- (1) 本稿は第二回日本アイリス・マードック学会（2000年10月7日）に於いて発表した原稿に、加筆修正したものである。なお、実際の研究発表においては最初に‘The Silver Swan’のCD鑑賞を行った。
- (2) ‘The Silver Swan’の歌詞は次の通りである。  
‘The silver Swan that living had no Note,  
When death approached unlocked her silent throat,  
Leaning her breast against the reedy shore,  
She sang her first and last, and sang no more.  
Farewell all joys, O death come close mine eyes,  
More Geese than Swans now live, more fools than wise.’  
Orland Gibbons: *First Set of Madrigals and Motets of 5 Parts*, 1612.  
「銀色の鳴かぬ白鳥／いまわのとき迫れば／胸をば岸に寄せて／  
ついに歌う一節（以下略）」（津川主一 訳）
- (3) 「サー・ガウエイン」については、マードック自身が作品中で触れている。431頁参照。
- (4) 「今のところまだ何でもない彼は何もしていない。何もしていないことをしているという言い回しを除いて何もしていない。窓の外は晴れている。いや。曇っているかもしれないがその保証はない。なにしろ雨が降っているかもしれないくらいだから。（中略）それどころか晴天と曇天と雨天がそんなことはあり得ないとする日常的施行を否定したり嘲笑したりするために数秒置きのくり返しを演じているのかもしれないではないか。」（筒井 7）
- (5) ちなみに彼の family name である Mir（ロシア語読みは「ミール」）は，“world”と“peace”を意味するという。
- (6) これについては井藤千穂氏の論文を参照のこと。

## 引証資料

Bloom, Harold. *Iris Murdoch*. New York: Chelsea House Publishers, 1986.

Dipple, Elizabeth. 'The Green Knight and Other Vagaries of the Spirit: or, Tricks and Images for the Human Soul: or, The Use of Imaginative Literature.' *Iris Murdoch and the Search For Human Goodness*. Ed. Maria Antonaccio and William Schweiker. Chicago: The University of Chicago Press, 1996. 138-168.

Martin, Priscilla. 'Sir Gawain and the Green Knight.' *Iris Murdoch News Letter* Autumn 1995, Number 9.

Murdoch, Iris. *The Bell*. Frogmore, St. Albans: Triad/Panther Books, 1958.

\_\_\_\_\_. *The Flight from the Enchanter*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1956.

Spear, Hilda D. *Iris Murdoch*. London: Macmillan. 1995.

Sutherland, Richard. *The Green Knight*: Review ([http://www.eye.net/Arts/Books/1994/bo\\_0512a.htm](http://www.eye.net/Arts/Books/1994/bo_0512a.htm)) 30/7/00.

アンダーソン, ウィリアム 『グリーンマン』 板倉克子訳 河出書房新社 1998。

井藤千穂 「アイリス・マードックにおけるユダヤ人——*The Green Knight*における非神話化とその意味」『藝文研究』74号 1998。

筒井康隆 『虚人たち』 中央公論社 1984。

平井杏子 『アイリス・マードック』 彩流社 1995。

\*この他拙論「『目覚め』の寓話——アイリス・マードック『鐘』」『イギリス女性作家の半世紀 第一巻 50年代・女が問う』岡村直美編 勁草書房 1999 参照。